

## 森のイベント感想3連チャン（森のサポーター KMさん）

### カモメのポジション取りと人生

霞ヶ浦で遊覧船に乗った。

霞ヶ浦に遊覧船が出ると、カモメは、エサがもらえることを知っているのだらう。遊覧船の周りに群がってくる。

乗客は、遊覧船の後ろのデッキに位置してカモメにエサを投げ渡す。

もちろん、あちらは生活や命が懸かっているからエサを落としたり、もらい損ねることはない。

かくして船の後ろにエサをもらいたいカモメの大群がくっついて大移動をすることになる。

カモメは、人間と一番近い位置がエサをとりやすいから、遊覧船の最後尾で人間に一番近いところに陣取る。一羽や二羽ではないから、人の真ん前をいかに確保するかが問題だ。

エサをもらいやすいポジションは、一度取られるとなかなか席が空かない。一番エサのもらいやすいポジションは、船の最後尾で、もちろんカモメの前にエサを持った人が立っていることが絶対の条件となる。高さは、頭よりやや下くらいから、胸の位置くらいまでだろうか。そういう位置に陣取って、人がエサを投げるのを待つ。

エサをもらったカモメは、船から一旦離れてご相伴にあずかる。エサをもらって去って行ったカモメのいた位置が空席となる。そこにどうやって入り込むか？ここが問題だ。

船の後ろから接近すると、前のカモメが邪魔になって、特等席をとることができない。そこで、まず、船の最後尾よりやや前に出て、船の側面について船と並行して飛行する。こうしておいて空席ができると、スピードを落としながら、斜め後方に滑り込む。そうすると人間に近い、いいポジションが取れるのだ。

つまり、最短距離だからといって、真後ろについて席空きを待つのでは、競争相手が多すぎたり、前方に邪魔が多い。一旦目的地から迂回して、回り込んで最適ポイントを得るのが効果的となる。

人生においても、キャリア形成や受験では、直線でまっすぐ進むことを目指す

しかし、迂回して一件無駄なことをするのが実は近道だったりするので人生はおもしろい。最終的なポジション取りこそ重要であり、ベストポジションを得るための迂回を考えるのもおもしろいし、偶然がいくつか作用して、迂回路を形成し、最終的にベストポジションになっていたというのも味わい深いだろう。

さらにリスクーだが、ウルトラCもあると思われる。それは、人間が乗っている船のデッキに降りたってしまうことだ。人間は好奇心があるので、ごっそりエサ

をくれる可能性がある。ただし、人間に捕まって、エサにされてしまう可能性もある。時には思考の枠を外して考えてみることもおもしろいだろう。

## 白墨の輪を鑑賞

この項は、ストーリーに関する記述を含んでいます。

白墨の輪のストーリーをじっくり楽しみたい方は、劇等をご覧になった後でお読みください。

では、感想なりとも少々。

一番気になったのがストーリーです。

えっ、まさか大岡裁き？

やるの、やらないよね……、落ちは違うんだよね。とか思ってみていたらやっぱり大岡裁きでした。でも、わかっているけど感動しました。

それで、「ストーリーに一工夫あってもいいのでは」というのを感想にしようと思っていたのですが、原作があるようなので調べてみると、プレヒトという人は、マルクスを学習した人なのですね。劇作家の前は、劇の評論家であったようですから、他人のパクリはやらないと思いました。となると……

ユングの神話の話を思い出します。人類共通の神話があるというアレです。集合無意識ですね。ユングの書いた曼荼羅と仏教の曼荼羅が似ています。たぶん調べれば大岡裁きと似た話はほかの地方にもあるのでしょうか。

この件は、私の中では解決しましたが、ほかに印象に残ったのは、「この子が金の靴を履いたら、それで私たちを踏みつけるようになる」というところです。確かにこれは強い動機になります。そのような人間になって欲しくないという願望もよくわかり、この物語の核心だと思います。よい発想です。

ただ。私は、この子が金の靴を履かなくても、誰か他の人が履いてしまうということ。だったら、条件を出して、この子を領主にして、よい政治を行うのも一法かと思いました。それが、「せめてこの子が言葉を話せるようになるまで」というせりふでしょう。言葉と共に思考の根源を伝えておけば、自力で「よい政治とは何か」を考えられるようになる可能性がありますから。

それと最後に「自動車はよき人に運転して欲しいと思っている」というのがあったと思いますが、今までの私の抱えている仕事の矛盾ですね。原子力ってもとは、原子爆弾と同じ原理ですから。よい原子爆弾とか、よい原子爆弾の使い方、なんてものがあるのかどうか。私はお金のため、自分の科学の知識を生かして原子力施設の安全審査をやっていますが、仕事には常に違和感があります。でも、さっきの金の靴と同じで私がやらなくても別の人もできてしまいます。原子爆弾は現実に日本で使用されましたが、ドイツより先に原子爆弾を開発するようにアメリカ大統領に進言したアインシュタインの後悔と似ています。

## 無用の用の積極活用「木登りマシン」

恒例のタケノコ掘りで体験できるのが木登りマシンだ。

その全容は写真を見てほしい。

このマシンを説明する前に、タイトルの無用の用について説明したい。

実際には使わないが、使っているときにないと困るもの、といったほどの意味だ。何かこう哲学的な表現になっているので、実例を示そう。

たとえば、地面に幅30センチの道を書く。この道を歩けといわれても、はみださずに誰でも歩ける。ところが幅30センチの道が、地上10メートルになったらどうだ。そうは簡単に歩けないだろう。（ちょっと話はちがうが、実際にやらないで、頭の中で実験を行うことを、思考実験という。実際に30センチの線を書かなくても結果は想像できるだろう。）

地上の30センチが安心して歩けるのは、30センチの外側に使っていない地面があるからだ。だから、道を踏み外しても安全である。これがいざというとき役に立つ。実際使っているのは幅30センチだけだが、その他の無用のはずの地面があることで安心感があり、いざという時の保険の作用もあるため、ずっと歩けるわけである。ところが地上10メートルだとそうはいかない。落ちればけがするし、打ち所が悪ければ死ぬかもしれない。と、こうなると足がすくんでしまうのだ。

本題に入る前に、輸送手段にとって摩擦はない方がいいということを理解しよう。リニアモーターカーを想像するとよくわかる。リニアモーターカーは、電磁気力によって車体を浮かせる。通常なら生ずる地面と車輪の摩擦をゼロにするためだ。もちろん車輪の軸に発生している摩擦もなくなる。これだと、投入しているエネルギーが抵抗に奪われることがない。

ついでにいうと、車体を浮かせても空気抵抗があるのだが、リニアモーターカーの軌道をトンネルにして中の空気を抜いてしまえば空気抵抗もなくなる。ただし、これは大がかりになる割に効果はそんなにないので、やらないと思う。移動手段の効率化は摩擦との戦いなのだ。

ということで、多くの場合、おじゃまな摩擦なのだが、これから紹介する木登りマシンは、お邪魔な摩擦を上手に使っている。

ここからは、無用である摩擦を積極活用している木登りマシンを見てみることにしよう。

木登りマシンは、二つのパーツからなる。まず左のパーツを説明する。左の器具の上端の丸い部分はロープである。これを木に巻き付ける。ロープの円の真ん中あたりに、逆のハの字になっている部分があるが、これが木の幹に接触する。



左の器具の下についているのは自転車のサドルのようなものだ。ここに尻を乗せるとハの字型の部分の木を押し、ロープは木に押しつけられる。こうして木とロープの間に摩擦が発生し、体重をかければかけるほど、落ちにくくなる。ちなみに摩擦力の大きさは、「押しつける力×接触面同士の性質により決まる値」と表される。

摩擦力の式を実感するには、10円玉を机の上に置いて、軽く上から押さえて動かすのと、かなり強く押しつけて動かすのとどっちが楽か確かめればよい。上から強く押しつければ、その分摩擦が大きくなり、動きにくくなる。

だから、ロープが木に強く押しつけられるように、思いっきり体重をかけて座った方が落ちにくい。



それではもう一度、写真を見てみよう。右側の器具も左と同じようなものだが、サドルの代わりに横に2本の棒がついている。この棒の間につま先を入れて、足の甲が上の横棒に、足の裏側が下の横棒に接するようにする。右の器具は当然のことながら、左の器具よりも地上側に取り付ける。



①上下の本木間に付けたワイヤーを張り、ピンポイントで足の間に差し込みます。



②足先についている押棒を太さの調節をしながら足の間に合わせて調整します。



③つま先を足裏の下に引っ掛けるようにして、足裏側にも乗せます。



④足裏側にも乗せたら、足先を上げて体重を乗せ、足裏側にも乗せたら足先も乗せられます。



⑤足先を上げて体重を乗せたら、足裏側にも乗せられます。



⑥足を引上げて体重を乗せたら、足裏側にも乗せられます。

登り方だが、上段の図の一番右端のように、足に体重をかけているときに、下段の図の左端のようにサドル付の器具を持ち上げる。持ち上げたところ下段真ん中の図のようにサドルにしっかり座る。そうして今度は下の横棒に引っかけている足を引っ張りあげる。今度は足に体重をかけ、足の乗っ

ている器具が安定したら、サドルを引き上げる。この繰り返しである。

降りるときはこの逆で、サドルに座りつつ、足を引っかけている足乗せの器具を下にずらす。下にずらしたら、今度は下の器具に体重を乗せて、サドルがついた装置を引き下げる。この繰り返しである。

移動の装置には不要だったはずの摩擦が、この装置では、見事にプラスになっているのではないか。

人生においても、失敗はつきものだ。できれば不要にしたい。だが、失敗のない人生などなく、誰でもどこかで失敗してしまう。

失敗を体験したときの姿勢が実は問題なのだと思う。転んでもただでは起きないつもりで失敗をプラスに転化する方法を考えよう。

私の経験からだと何かは見つかるものだ。無用の用の積極活用を行って、人生を豊かにしよう。